

反射神経を整える

いつの頃からか、実家に一人で暮らす高齢の母の口癖が「ありがとう…」になりました。

電話でも手紙でも必ず最後の言葉は「ありがとう…」です。母は昔から機械に弱く、携帯電話もスマートフォンも使いこなすことができません。何度かチャレンジしたこともありますが、「かえてストレスがたまる…」と言って断念しました。その代わり昔から“超”が付くほどの「筆まめ」で、何か用事があると電話より早くお礼や感謝の手紙が届いたりします。

私の母のコミュニケーションツールとして、はがきや手紙は必須アイテムといってよいでしょう。「書く」ことによって周りの人たちとの人間関係を円滑に築いてきたともいえます。もちろん、メールや LINE の即時性やスピードには絶対に勝てませんが、書くことや文字に残すことによって、伝わる相手への思いやりや心遣いも捨てがたいものがあります。

『暮らしの手帖』の前編集長である松浦弥太郎氏は、コミュニケーションの基本の一つとして、【反射神経を整える】ことをあげています。松浦氏によれば、【反射神経を整える】とは、「相手に素早く反応する癖を体に染み込ませておく」ということです。

皆さんの周りにも「メールの返信や電話の折り返しが常に早い」人がいるのではないのでしょうか？こちらが返事を求めているなくても、「確かに受け取りました…」「ご連絡ありがとうございました…」と必ず返してくれる人もいます。松浦氏によれば、こうした行為は相手を待たせずに次の行動に進ませてあげるという「与える行為」であり、早ければその場で終わるという「自分にとってのメリット」でもあります。

【反射神経を整える】ことは、相手との信頼関係を深め、コミュニケーションの質を高めるものでもあります。逆に相手に何かお願いしたり、連絡したりするときの返事がなかなか来なかったり、間延びしてしまったりしたら、その先の相手とのコミュニケーションも何か緩んだものになってしまう懸念があります。

この「反射神経」という言葉は、教師の仕事においても汎用性が高いと私は思っています。

子どもや保護者とのどんな小さな約束にも、迅速に誠意をもって応える教師の姿勢は、相手との信頼関係を深めてくれます。私たち一人一人が常に意識して仕事の中に「反射神経」を取り込むことで、学校に対する信頼感を高め、格段に仕事がしやすくなると思っています。